

ミュージアム
『トワイライト博物館』(2013年)

初野 晴／著 講談社

施設で育ち14歳で天涯孤独となった勇介は、大叔父が遺した博物館を継ぐことになるが、そこは時間旅行を秘密裏に行う実験施設だった。事故で意識が戻らないナナのために、勇介は魂を救う決意をするが、その方法はとんでもないものだった。「救出者」となり精神を過去へ飛ばす学芸員・琵琶の「パートナー」として、中世ヨーロッパの暴君に立ち向かうことに。過酷な冒険の中、学芸員たちの知恵、知識、絆が次第に勇介の心を強くする。



『かぜまち美術館の謎便り』(2014年)

森 晶麿／著 新潮社

カホリは過疎の町、香瀬町で保育士として働いている。ある日、町の美術館の立て直しのために、学芸員の佐久間と、その娘で保育園児のかえでが引越してきた。

同じころ、町のあちこちにおかしな絵葉書が届く。描かれているのはピカソやゴッホなどの有名な絵をモチーフにした、町の人々の姿だ。差出人は十八年前に亡くなった、カホリの兄ヒカリ。ヒカリはどうしてそんな絵を書いたのか。そして今になって絵葉書が届いたのはなぜか。カホリと佐久間は絵に込められたメッセージを調べ始める。



『博物館のファントム』

箕作博士のミステリ標本室』(2014年)

伊与原 新／著 集英社

国立自然史博物館に職を得て一か月の新人職員、池之端環と標本収蔵室のファントム、箕作類がさまざまな事件を解決していく、短編集です。国立自然史博物館は単なる展示施設ではありません。その本分は標本の収集とその調査研究にあります。事件自体もおもしろいのですが、博物館の仕事の様子・博物館の意義なども細かく書かれていて、興味深い作品になっています。この本を読めば、自然史博物館に行きたくなります。



『注文の多い美術館』

美術探偵・神永美有』(2014年)

門井 慶喜／著 文藝春秋

美術品の真贋が「味」で分かるという特技を持つ美術コンサルタント・神永美有が、美術大学准教授・佐々木昭友と、自称芸術家・イボンヌと共に、いわくつき美術品の謎に迫ります。作中で日本史と西洋史が絶妙に交じり合っているところも読みどころです。本作はシリーズ3作目に当たり、前作に『天才たちの値段』『天才までの距離』があります。



『博物館の一日』(2012年)

いわた 慎二郎／著 講談社

クジラの骨格標本は、死んだクジラを2年半のあいだ砂に埋めて、微生物に骨以外を分解させてつくるそうです。本書では国立科学博物館の展示内容や、展示物の保存・管理の方法などが詳しく解説されています。

この本を読めば、きっと博物館に行きたくなることでしょう。小さなお子さんから大人まで、みんなが楽しめる絵本です。



『美術館ってどんなところ?』

(2013年)

フロランス・デュカトー／文 野坂 悦子／訳
シャンタル・ペタン／絵
青柳 正規／日本語版監修 西村書店

美術館についてわかりやすく書かれている入門ガイド絵本です。美術館にはどんなものが集められ、展示されているところなのか。「常設展」と「特別展」の違いは? どうやって見学したらいいのか? などみんなが知りたいと思っていることがすべて書かれています。「こんなヒミツ、知ってた?」と、この本のいたるところでヒミツを教えてくれているので、知らない人には、ぜひ、そのヒミツを教えてください。

